〔類聚名義抄七雨〕露音路　ツユ

〔東雅一天文〕露ツユ　義不レ詳、萬葉集抄には、ツといふは水なり、水の白きをツユといふと見えたり、（中略）ツユとは、そのツブ〳〵として、白をいひしも知るべからず、粒をツブといふも、ツといひしには、圓なる義ありしに似てけり、古訓に圓、讀てツブラといふなり、

〔倭訓栞前編十六都〕つゆ　露をいふ、つは粒也、ゆは齋也、粒々潔白なるをいへり、玉篇に、天之津液下潤萬物者也、露は置といひて降とはいはず、

〔八雲御抄三上天象〕露　朝　ゆふ　ゑら　うは　ゑた　はのぼる地よりあがるなり　万には、ゆふべにをきて、つとめてきゆとよめり、後撰に、野べの秋はぎみがく月夜とよめるは露の心なり、つゆのかごとは、かこつといふこゝろ也、つゆけきは ゑげきなり　ゑげきたまともいふ　後撰に、をきつめはと云り、露霜ふりなづむといへり、万歌也、涙によするなり　春もよめど、夏秋の物なり、

〔夫木和歌抄十露三〕千五百番歌合　家長朝臣

みせはやなあかつき露のをき別篠分るあさの袖のけしきを（中略）

秋御歌中　花山院御製

萩の花さきみだれたる玉ぼこの朝の露は色ことにみゆ

〔夫木和歌抄十露三〕文治二年百首　定家卿

ふぢばかまあらぬ草葉もかほるまで夕露ゑめる野べの秋風

〔源氏物語四夕顔〕かほは猶かくし給へれど、女のいとつらしと思ふべければ、げにかばかりにてへだてあらんも、ことのさまたがひたりとおぼして、

ゆふ露にひもとく花は玉ぼこのたよりにみえしえにこそありけれ、露のひかりやいかにとの給へば、ゑりめにみをこせて、